

医療功労賞 2人喜び



柔道整復師

齋藤 誠 さん 75 (豊田市)

トヨタ自動車本社近くに接骨院を開業、今年で50年を迎えた。

「開業して少したった頃、80歳代の2人暮らし夫婦の奥さんが下腿骨を骨折しました。旧下山村まで二十数キロ。年末年始を含め約3か月ほど週3回通った。そのかいあって、一人で歩けるまで回復したのが今でも印

長年にわたって地域の医療活動に貢献した人に贈られる「第50回医療功労賞」(読売新聞社主催、厚生労働省、日本テレビ放送網後援、損保ジャパン、アインホールディングス協賛)の県受賞者に、豊田市の柔道整復師齋藤誠さん(75)と、岡崎市の理学療法士山本佳司さん(58)が選ばれた。2人に受賞の喜びの声を聞いた。

理学療法士

山本 佳司 さん 58 (岡崎市)



「障害に負けず、リハビリに頑張っている子どもたちのサポートを続けることができてよかった。子どもたちのおかげでこの賞がいただけたと感謝しています」と受賞を喜ぶ。

理学療法士となって36年の山本さんが1985年に当時の県心身障害児療育センター・第二青い鳥学園に

象に残っています」

岡崎市で接骨院を経営していた父親の姿を見て育ち、自然にこの道を選んだ。専門学校を卒業後、名古屋市内の整形外科病院に勤務。その傍ら母校の教務にも携わった。接骨院を開いたのは5年後。同時に専科教員として教壇に立ち、数多くの後進を育て

た。

開業当時は、トヨタ自動車のスポーツグラウンドが近くにあったことから、サッカー、ソフトボール、野球など、スポーツ選手のけがをみる機会も多かった。その経験を生かし、現在は市内の小中学校のスポーツ大会にボランティアで駆けつけ、競技中の骨折や脱

施術50年教壇にも立つ

岡崎発リハビリ広がる

入った頃は、リハビリという言葉自体が広まっておらず、リハビリといえば痛いもの、子どもが泣くのは当たり前と思われていた。そんな中、山本さんは、岡崎リハビリテーション勉強会を設立、毎月講師を招くなどして、当時の施設長、上田正氏が開発した「上田法」に基づき、痛みを伴わずに体

のこわばりを取り除く新しい手法を広めてきた。

「体が楽になるのを親も子も実感し、何より泣く子がいなくなった」という。岡崎発のリハビリ法は、ドイツ、韓国など海外へも広がりに、理学療法士も飛躍的に増えた。

山本さんのモットーは、成長していく障害児の将来

曰、ねんざなどの処置にあたる。

「受賞は光栄。開業50年という節目にもあたり、周囲の人たちに感謝の気持ちでいっぱいです」と語る。次男が後継者として接骨院と一緒に勤務している。体力的にもそろそろ息子に任せようかと考えていました。が、賞をいただいた以上、これを励みにまだまだ頑張っていきたいですね」と元気がいっぱいだ。

を考えたりリハビリ。介助を受けやすい柔軟な体をつくり、社会で暮らしていける生活力を身につける。自由に移動できるよう電動車いすの訓練も必要だ。

何歳になっても障害者とも生きていかななくてはならない人たちを、いつどんな時にも受け入れる施設。「年齢が過ぎたからといって拒まない。リハビリ難民を生まないのが、私たち青い鳥の願い」と信じる。